

Title	蘇軾と「棋」
Sub Title	Su-Shi and "Go"
Author	池澤, 滋子(Ikezawa, Shigeko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.87, (2004. 12) ,p.128- 148
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岡晴夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00870001-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

蘇軾と「棋」

池澤 滋子

蘇軾自らが不得手とするものに、酒・音楽・棋がある。そのことは詩文の中にもしばしば触れられる。例えば「錢穆父の会飲に次韻す〔次韻錢穆父會飲〕」詩（『蘇文忠公詩合注』卷三十六）の「我が飲奕棋の如し〔我飲如奕棋〕」の自注では、「世に作詩は奕棋の如し、奕棋は飲酒の如し。飲酒は乃ち大ひに戒むとの語と有り。僕の棋・酒の二事に於けるや、俱に能はざるなり。〔世有作詩如奕棋、奕棋如飲酒、飲酒乃大戒之語。僕於棋、酒二事俱不能也。〕」とある。また『遯齋閒覽』では「子瞻嘗て自ら言ふ、平生三つの人に如かざるあり、謂はく棋を著す、酒を吃す、曲を唱すなりと。〔子瞻嘗自言、平生三不如人、謂著棋、吃酒、唱曲也。〕」（『合注』引「王註」というが如くである。しかし實際嗜むことは少なかつたとしても、詩の題材として扱うときには、蘇軾は生得の勦の良さで対象の妙奥に到達するばかりか、しばしば独自の見解をも加えて、独特の文人趣味の世界を展開していると思われる。

筆者はかつて蘇軾の音楽理解に關わつて、琴に關する詩文を取り上げたことがある。蘇軾以前の琴に対する伝統的な見方は、儒教的礼樂における雅樂としての琴、そして陶淵明の無絃琴に代表される隱逸志向を象徴する樂器であつた。しかし蘇軾は伝統的な考え方を踏まえながらも、無絃琴に対する独自の見方を詩に盛り込んだり、『洛神の賦』の世界を背景にして琴の詩の中で恋愛を詠じる、等の新たな視点を示した。

本論では、主として「棋」という側面から蘇軾の文人趣味に分析を加えたい。また同時代の文人達の詩をも取りあげ、北宋初期から中期にかけての文人達が「棋」に如何なる心情を寄託していたのか、という問題についても触れてみたい。

二

棋は多くの北宋文人に愛好された。例えば石介（一〇〇五—一〇四五）の「觀棋」詩は、

人は皆奕を善くすと稱す、伊だ我れ獨り能はず、試みに坐して勝敗を觀るも、白黒何ぞ分明ならん。（人皆稱善奕、伊我獨不能、試坐觀勝敗、白黒何分明。）（『徂徠石先生文集』卷二）

とあり、碁を打てない石介がひげめを感じるほど盛んだつた様子が窺える。

そこでまずは棋を善くした文人達の詩文を通じて北宋の文人における棋の流行のありようを見てみたい。

范仲淹（九八九—一〇五二）は碁の愛好者の一人で、しかも尋常一様の嗜み方ではなかつたようである。「贈棋者」詩では、

何れの處にか神仙に逢ひ、此の棋上の旨を傳へん。静かに生殺の権を持ち、密かに安危の理を照らす。勝に接すれば雲の舒びるが如く、敵を禦ぐこと山の止まるが如し。…南軒に春日長く、国手相ひ喜ぶことを得たり。泰山も目を礙げず、疾雷も耳を経ず。一子千金よりも貴く、一路千里よりも重し。精思神に入り、変化胡ぞ能く擬せんや。成敗は之れ人に繋り、吾當に棋史を著すべし。〔何處逢神仙、傳此棋上旨。靜持生殺權、密照安危理。接勝如雲舒、禦敵如山止。…南軒春日長、国手相得喜。泰山不礙目、疾雷不經耳。一子貴千金、一路重千里。精思入於神、變化胡能擬。成敗繋之人、吾當著棋史。〕〔范文正公集〕卷一

と、囲碁に熱中していると時の境地を、自然の景観が展開する様に喩えたり、哲學的表現を用いるなどして様々に詩に詠じ、最後には「棋史を著そう」という意気込みまで述べている。さらに別の詩でも「悪んぞ酒を勧むる時共に酔ふを囚らん、痛だ棋に贏つ處肯へて相ひ饒さんや〔悪勸酒時囚共酔、痛贏棋處肯相饒〕〔依韻酬邠州通判王稷太傅〕〔范文正公集〕卷四)、とあり、友との対局が彼の大きな楽しみだったことが窺われる。

同様に棋を打つことを實際楽しんでいたということがその詩文から窺われる文人として王禹偁(九五四—一〇〇二)、邵雍(一〇一一—一〇七七)、歐陽修(一〇〇七—一〇七二)、王安石(一〇二一—一〇八六)等があげられよう。王禹偁はしばしば竹のある間居、夜の静寂等の風景の中で棋を打つさまを詠じている。

秋光雖寂澹、幽興入詩家。

籬暗螢啼菊、園荒蟻上茄。

圍棋知日影、理髮見霜華。

秋光寂澹と雖も、幽興詩家に入る。

籬は暗くして螢は菊に啼き、園は荒れて蟻茄に上る。

棋を圍んで日影を知り、髮を理めて霜華を見る。

向曉兒童喜、溪僧遺晚瓜。

曉よみに向むかとして兒童喜び、溪僧晚瓜を遣はなく。

〔秋居幽興（其一）〕『小畜集』卷九

雨屐送僧莎逕滑、夜棋留客竹齋寒。

雨屐僧を送って莎逕滑り、夜棋客を留れども竹齋寒し。

〔王禹偁「贈浚儀朱學士」〕『小畜集』卷十二

七十年華鬢未霜、道情偏稱宰豐陽。

七十年華鬢未だ霜ならず、道情偏ひとえに宰豐陽と稱す。

早衙請印無仇覽、夜榻圍棋祇孟光。

早衙印を請ふも仇覽無く、夜榻棋を圍むは祇だ孟光のみ。

〔王禹偁「寄豐陽喻長官」〕『小畜集』卷九

誰種蕭蕭數百竿、伴吟偏稱作閑官。

誰か種うえたる蕭蕭たる數百竿を、伴に吟じて偏ひとえに稱す閑官と作るを。

不隨天豔爭春色、獨守孤貞待歲寒。

天豔あまに隨まって春色を争はず、獨り孤貞を守って歲寒を待つ。

聲拂琴床生雅趣、影侵棋局助清歡。

聲は琴床を拂はらって雅趣生じ、影は棋局を侵して清歡を助く。

明年縱便量移去、猶得今冬雪裏看。

明年縱便たい量移し去らるるも、猶ほ今冬雪裏ゆきに看るを得ん。

〔王禹偁「官舍竹」〕『小畜集』卷九

これら靜謐な風景の中の棋は唐詩などでもしばしば詠じられる。例えば「簾卷茶烟禁墮葉、月明棋子落深苔」（貫休「將入匡山宿韓判官宅」）『禪月集』卷二十五、「窓間半偈聞鐘後、松下殘棋送客回」（溫庭筠「寄情源寺僧」）『溫庭筠詩集』卷四）等である。

王禹偁は生涯で三度の左遷を経験しているが、「官舍竹」と「秋居幽興」の二詩は左遷先の商州で詠じた詩である。

王禹偁にとつて碁を打つことはまた左遷先での孤独をなぐさめ、愁いを忘れさせてくれるものであった。そのことは二度目の左遷先黄州での詩「月波樓詠懷」(『小畜集』卷六)からも窺われる。

樓中何所有、官醞湛虻蜉。 樓中何の有る所ぞ、官醞虻蜉湛む。

棋枰留客坐、琴調待僧抽。 棋坪客を坐に留め、琴調僧の抽するを待つ。

橘苞鄰藥鼎、詩筆間茶甌。 橘苞藥鼎の鄰、詩筆茶甌の間。

平生性幽獨、寂寞誰獻酬。 平生性幽獨、寂寞誰か獻酬せん。

官常已三黜、懷抱罹百憂。 官常已に三たび黜けられ、懷抱百憂罹る。

凭欄憶王粲、望闕同子牟。 欄に凭りて王粲を憶い、闕に望んで子牟と同じくす。

囲碁を打つということが文人達にとつて、世俗のことに心を煩わされず、超然とした態度で生きているというポーズを示すものとなったのは、六朝時代棋を善くした文人達の影響であろう。例えば『晉書』卷七十九「謝安傳」には、

時に苻堅強盛にして、疆場虜れ多し、諸將敗退相繼ぐ。安、弟の石及び兄の子玄等を遣して機に應じて征討せしむ。：(安)方に玄、圍と棋を別墅に賭す。安、常に棋、玄に劣る。是の日玄懼れ、便はち敵手と為りて又た勝たず。安、其の甥羊曇を顧みて謂ひて曰く「墅を以て汝に乞う。」と。安、遂に游渉し、夜に至りて乃わち還り、將帥に指授して、各々其の任に當らしむ。玄等既に堅を破り、驛書の至る有り。安、方に客に對して棋を圍む。書を看て既に竟わり、便ち攝りて床上に放ち、了に喜色無く、棋すること故の如し。客之を問へば、徐ろに答へて「小

兒の輩遂に已に賊を破る。」と云ふ。既に罷わり、内に還りて、戸の限を過り、心喜ぶこと甚し、屐齒の折れるを覺ず、其の情を矯め物を鎮めること此の如し。總統の功を以て、進みて太保を拜す。

また『晉書』卷四十九「元籍傳」には、

籍、禮教に拘らずと雖も、然れども言を發すること玄遠なり、口、人物を否臧せず。性至孝、母終りしとき、正に人と棋を圍む、對者止めんことを求む、籍留めて與にも賭を決す。既にして酒を飲むこと二斗、聲を擧ぐるること一號、血を吐くこと數升なり。

とある。

先の謝安の故事では困碁に關わる二つのエピソードが書かれている。一つは苻堅という強敵の討伐を命ぜられた謝安がすこしも恐れることなく、別荘で友人と困碁をしたという話で、いつもは謝安より強いはずの謝玄が出陣の前に心落ち着かず、かえつて安に困碁で勝つことができなかつたというエピソードは、謝安が敵を前にしても平常心をもつて事に当たつていたということを示すものであろう。また一つは謝玄らが敵を破つたという吉報が届いても、困碁をしていた謝安は喜色を表すこともなく静かに対局を続け、困碁が終つて家に帰つてから始めて下駄の齒が折れるほど大喜びをしたという故事である。これは「元籍傳」で、親孝行であつた元籍が母の死を聞いても、困碁の勝負を最後まで止めず、後になつてから大酒を飲んで号泣し血を吐いたという故事と同様に、心にどんなに強い喜びや悲しみの感情が湧きあがるうとも、困碁に対してはそれをごつと抑えて肅々と勝負に臨むという文人の一つの態度を示しているもので

あろう。「晉書」卷四十三「王戎傳」にも「戎、職に在りて殊に能無しと雖も、而して庶績修理す。後に光祿勳、吏部尚書に遷り、母憂を以て職を去る。性至孝にして、禮制に拘らず。酒を飲み肉を食らひ、或は奕棋を觀る。而して容貌毀悴し、杖して然して後に起つ。」という記事が見える。

王禹偁の左遷先で詠じられた詩にしばしば棋が登場するのも、これらの故事と無關係ではない。靜謐な謫居で囲碁を打ちながら、王禹偁は自らの憤懣の情を心の底に抑え、幾度もの左遷に動じない平然とした態度で臨もうとしたのであろう。

王禹偁にはまた「筵上狂歌送侍棋衣襖天使」詩がある。

昔事先皇叨近侍、北門西掖清華地。昔事先皇の近侍を叨くし、北門西掖清華の地。

太宗多材復多藝、萬機餘暇翻棋勢。太宗多材復た多藝、萬機の餘暇に棋勢を翻す。

對面千里為第一、獨飛天蛾為第二。對面千里を第一と為し、獨り天蛾を飛ばすを第二と為す。

第三海底取明珠、三陣堂堂皆御製。第三は海底に明珠を取る、三陣堂堂として皆御製。〔『小畜集』卷十三〕

この詩は太宗が棋の名手であったことを懐かしんだものであり、皇帝による棋の愛好は、士大夫にも影響をあたえていたということが予想される。

「六一居士」と稱した歐陽脩が「吾が家は書一萬卷を蔵し、三代以來の金石遺文一千卷を集録す。琴一張有り、碁一局有りて、常に酒一壺を置く」（『六一居士傳』『居士集』卷四十四）として棋を自分が愛好するものの一つとして挙げてゐることは夙に知られている。

竹樹日已滋、軒窗漸幽興。竹樹日已に滋く、軒窗漸やく幽興。

人閑與世遠、鳥語知境靜。人閑にして世と遠く、鳥語境靜を知る。

春光藹欲布、山色寒尚映。春光藹布かんと欲し、山色寒くして尚お映ず。

獨收萬慮心、於此一枰競。獨り萬慮の心を收め、此より一枰を競わん。

〔歐陽修「新開棋軒呈元珍表臣」〕〔居士外集〕卷二〕

王安石には次のような詩がある。

北風吹人不可出、清坐且可與君棋。北風人に吹いて出づる可からず、清坐して且く君と棋す可し。

明朝投局日未晚、從此亦復不吟詩。明朝局を投ず日未だ晚からず、此従り亦た復び詩を吟ぜず。

〔王安石「對棋與道源至草堂寺」〕〔臨川先生文集〕卷三〕

「對棋與道源至草堂寺」はこれから友人と碁を打ち始めようという時の詩であろう。四句の中に、作者の碁に対する意気込みが感じられる。「明朝局を投ず」の「投局」は、碁盤をひっくりかえす意（『南史』卷二十「謝弘微傳」に「弘微性寬博、無喜愠。末年嘗與友人棋、友人西南棋有死勢、復一客曰、西南風急、或有覆舟者。友悟乃救之。弘微大怒、投局於地。」とある）であるが、ここでは碁を打つのをやめることを指そう。作者はこれから明日の朝まで碁の勝負をくりひろげようというのである。「此従り亦た復び詩を吟ぜず」という最後の句も碁の勝負に集中しようという作者の

意志表示と考えられる。作者にとつて、一手一手大事に考えながら碁を打つということは、一字一句言葉を推敲して詩を作ることに共通する精神の一点集中を要求される作業だったのではないか。それゆえ、ここでは詩を作るのはやめて、対局に集中しようというのであろう。

王安石において、作詩と囲碁の密接な關係を示唆するものに、「薛肇明と奕棋し梅花詩を賭して輸く一首〔與薛肇明奕棋賭梅花詩輸一首〕」（『臨川先生文集』卷二八）がある。王安石にとつて、作詩も囲碁も高雅な知的樂しみとして共通性を持つものであつたのだから。王安石よりも少し時代は遡るが徐鉉（九一七—九九二）にも「棋して詩を賦すことを賭く、劉起居に輸く〔棋賭賦詩輸劉起居〕」（『徐公文集』卷五）という詩があり、碁に負けて詩を賦す遊びは一般的なものであつたのかもしれない。

囲碁を天地に擬えるという考え方は、すでに後漢・班固の「奕旨」に見える。

局必ず方正なるは、地則に象るなり。かたど道必ず正直なるは、明德を神にする也。棋に白黒有るは陰陽分るる也。駢羅列布するは天文に倣う也。∴上に天地の象有り、次に帝王の治あり、中に五霸の権有り下に戦国の事有り。其の得失を覽れば古今略備はる。（局必方正象地則也。道必正直神明徳也。棋有白黒陰陽分也。駢羅列布效天文也。∴上有天地之象、次有帝王之治、中有五霸之権、下有戦国之事。覽其得失、古今略備。）（『古文苑』卷第十七）

このような考え方をさらに押しすすめ、碁を歴史の興亡にたとえ、易、老莊、儒教の哲学を加味して棋に独特の世界観を展開しているのが、邵雍の一千言以上に及ぶ「観棋大吟」である。その詩の最後の部分は次の如くである。

成敗須歸命、興亡自繫時。

天機不常設、国手無常施。

往事都陳迹、前書略可依。

比觀之博奕、不差乎毫釐。

消長天旋運、陰陽道範圍。

吉凶人變化、動靜事樞機。

疾走者先顛、遲茂者後萎。

與其交受害、不若兩忘之。

求魚必以筌、獲兔必以罟。

得之不能忘、羊質而虎皮。

道大聞老子、才難語仲尼。

造形能自悟、当局豈憂迷。

黑白焉能洩、死生奚足猜。

應機如破的、迎刃不容絲。

勿訝傍人笑、休防冷眼窺。

既能通妙用、何必患多岐。

同道道亦得、先天天弗違。

成敗須らく命に歸す、興亡自ら時に繫る。

天機常には設けず、国手常には施さず。

往事都な迹を陳ぶ、前書略は依る可し。

之を博奕に比して觀れば、毫釐も差なわらず。

消長は天運を旋し、陰陽は道圍に範る。

吉凶人變化し、動靜事樞機なり。

疾く走する者は先に顛し、遅れて茂る者は後に萎す。

其れ交ごも害を受くるよりは、兩つながら之を忘るるに若かず。

魚を求むるに必らず筌を以てし、兔を獲るに必らず罟を以てす。

之を得て忘ること能はざれば、羊質にして虎皮なり。

道大にして老子を聞き、才難くして仲尼に語る。

造形能く自ら悟らば、当局豈に憂迷せんや。

黑白焉んぞ善く洩めんや、死生奚んぞ猜むに足らん。

機に應じて的を破るが如し、刃を迎えて絲を容れず。

訝かる勿かれ傍人の笑ふを、防ぐを休めよ冷眼の窮まるを。

既に能く妙用に通ずれば、何ぞ必ずしも多岐を患らわん。

道と同じくすれば道亦た得、天に先んずれば天違ふこと弗し。

邵雍は「造形能く自ら悟れば、当局豈に憂迷せんや」と、囲碁を道に合い通じるもの、天の道理にかなうものという考えを詩に詠じている。

このように北宋の文人達はそれまでの囲碁に対する伝統的発想を踏まえながら、それぞれの生活経験を盛り込んで、様々に棋を詩に詠じ分けていた。それでは蘇軾の場合はどうであろうか。次に蘇軾の「觀棋」詩（〔合注〕卷四十二）を採りあげる。

三

「觀棋」並引

余素不解棋、嘗獨遊廬山白鶴觀。觀中人皆闔戶晝寢、獨聞棋聲於古松流水之間、意欣然喜之。自爾欲學、然終不解也。兒子過乃粗能者、儻守張中日從之戲、予亦隅坐、竟日不以為厭也。

余素より棋を解さず、嘗て獨り廬山の白鶴觀に遊ぶ。觀中の人皆戸を闔じて晝寢す。獨り棋聲を古松流水の間（註）に聞き、意欣然として之を喜ぶ。爾れ自り學ばんと欲すれども、然れども終に解せざるなり。兒子過は乃ち粗能（註）くする者なり、儻守張中日これに従ひて戯る。予亦た隅坐す、竟日以て厭と為さざるなり。

五老峰前 白鶴遺址 五老峰前 白鶴の遺址

長松蔭庭 風日清美 長松庭を蔭ひ 風日清美なり

我時獨游 不逢一士 我れ時に獨り遊び 一士に逢わず

誰歟棋者 戸外履二 誰か棋する者ぞ 戸外履二つあり

不聞人聲 時聞落子 人聲を聞かず 時に子の落つるを聞く

紋枰坐對 誰究此味 紋枰に坐して對す 誰か此味を究めん

空鉤意釣 豈在魴鯉 空鉤もて釣を意う 豈に魴鯉に在らんや

小兒近道 剥啄信指 小兒道に近し 剥啄指まかに信す

勝固欣然 敗亦可喜 勝てば固より欣然たり 敗るるも亦た喜ぶ可し

優哉游哉 聊復爾耳 優なるかな游なるかな 聊か復た爾るのみ

この詩は王文誥の『蘇文忠公詩編注集成総案』によると、蘇軾の晩年、紹聖五年（一〇九八）四月に左遷先の海南島で作られたものである。詩の前半は昔、廬山に旅したときの情景を回顧して詠じられたものである。人氣のない山中で棋を打つ音だけが響くことによつて、より一層山中の静寂が引き立てられるという描写であらう。

廬山でのこの経験について、蘇軾は別の文章で司空図の詩を引いて次のように述べる。

司空図表聖自ら其の詩を論じ、以て味を味の外に得ると為す。：「棋聲花院を閉ざし、鑪影石台に高し」と云う。吾れ嘗て五老峰に遊び、白鶴院に入る。松陰庭に満ち、一人を見ず、惟だ棋聲を聞く。然る後に此句の巧なるを知れるなり、但だ恨むらくは其れ寒儉にして僧態有り。杜子美に「暗飛の螢ひと自り照らし、水宿の鳥相い呼ぶ。」（倦夜）、「四更山月を吐き、残月水樓に明らかなり。」（月）と云うが若きは、則ち才力富健、表聖の流を去る

こと遠し。〔司空圖表聖自論其詩、以為得味於味外。…云「棋聲花院閉、鑿影石台高」吾嘗游五老峰、入白鶴院、松陰滿庭、不見一人、惟聞棋聲、然後知此句之巧也、但恨其寒儉有僧態。若杜子美云「暗飛螢自照、水宿鳥相呼。」、「四更山吐月、殘月水明樓。」則才力富健、去表聖之流遠矣。〕

〔書司空圖詩〕中華書局『蘇軾文集』卷六七

この文章に言うところは、蘇軾が司空圖の作を味わい深いものとしながらも、杜甫の詩と比較してなお「寒儉にして僧態有り」として不満の意を表している。それは「花院閉」「石台高」という情景があまりにも美しく静かでひっそりしすぎていて、そこに杜甫の詩句「螢自照」「鳥相呼」「山吐月」「水明樓」に見えるような風景が主体的に働きかけるような力強さを感じないということであろう。

静謐な趣を醸し出すために棋や棋を打つ音が詩に詠みこまれることは少なくない。例えば唐詩では、

山僧對棋坐、局上竹陰清。映竹無人見、時間下子聲。

〔白居易「池上二絶」〕『白氏長慶集』卷六十五

梅院重門掩、遙遙歌吹邊。庭深人不見、春至曲能傳。

花落彈棋處、香來薦枕前。使君停五馬、行樂此中偏。

〔孫逖「和常州崔使君詠後庭梅二首（其二）」〕『全唐詩』卷一百十八

花間酒氣春風遠、竹裏棋聲夜雨寒。三頃水田秋更熟、北窗誰拂舊塵冠。

石衣如髮小溪清、溪上柴門架樹成。園裏水流澆竹響、窗中人靜下棋聲。

(許渾「村舍二首(其二)」『丁卯集』卷上)

(皮日休「李處士郊居」『全唐詩』卷六一三)

等があり、蘇軾は自らも他の詩で

谷鳥驚棋聲、山蜂識酒香。

(「次韻子由綠筠堂」『合注』卷六)

晚照餘喬木、前村起夕烟。棋聲虛閣上、酒味早霜前。

(「晚遊城西開善院浮舟暮歸」二首『合注』卷五十)

と詠じている。しかしこの「観棋」詩の面白さは、前半に廬山で自らが体験した情景を描き、静謐な餘韻を醸し出すばかりでなく、後半で現在自分が住み暮らす海南島の日常生活の様子を続け、その味わいを体現する人間の姿をも詠じている点であろう。第十一句で「紋枰に坐して對」しているのは蘇軾の子蘇過と僭守張中である。

第十三・十四句「空鉤意釣、豈在魴鯉」について、馮應榴は『新唐書』卷百二十一「隱逸傳」の張志和の故事「每垂釣不設餌、志不在魚也」を用いたという。これは棋の味わいを表現するのに釣りに關する故事を使用しているという点で、蘇軾が導入した新しい表現方法として注目されよう。つまり釣り糸を垂れる行為と、碁を打つという行為とに蘇軾は共通性を見出しているのである。

「観棋」詩と同様に張志和「每垂釣不設餌」の故事を用いたものとして、「江郊」詩(『合注』卷三八)がある。

惠州歸善県治之北、數百歩抵江少西、有盤石小潭可以垂釣、作江郊詩云、

惠州歸善県治の北、數百歩にして江に抵る。少しく西すれば、盤石小潭の以て釣を垂れる可き有り。江郊の詩を作りて云ふ、

江郊蕙處 雲水蒨綯 江郊蕙處として 雲水蒨綯たり

碕岸斗入 洄潭輪轉 碕岸斗入し 洄潭輪轉す

先生悅之 布席閒燕 先生之を悦び 席を布して閒燕す

初日下照 潛鱗俯見 初日は下を照らし 潛鱗は俯して見ゆ

意釣忘魚 樂此竿線 意に魚を釣るを忘れ 此の竿線を樂しむ

優哉悠哉 玩物之變 優なるかな悠なるかな 玩物の變

この詩は作者が青々と美しい川原の風景、潭淵の渦巻く水の面白さに惹かれて、そこで席を設けゆつたりと酒を飲み、釣り糸を垂れるというさまを詠じたものである。朝日が水面を照らすと、水は澄みきっているのだから、水底に潜んでいる魚が見える。そうした風景を樂しみながら釣り糸を垂れているうちに、いつしか魚が釣れるかどうかということよりも、つり竿や釣り糸の感触を樂しむことに夢中になり、すべてを忘れて悠々とした時を過ごしている自分自身を發見するのである。最後の「玩物之變」は「釣り」という遊びの中で發見したそうした自らの意境の変化をいうのであろう。

この「江郊」詩にいう魚を得るといふ本来の釣りの目的よりもつり竿や釣り糸の感触を樂しむという「玩物之變」こそが、「觀棋」詩第十七、八句に述べられる「勝固欣然、敗亦可喜。」という囲碁の境地に通じるものである。囲碁とこの本来勝敗を争うゲームを行いながら、いつしか勝敗という目的を忘れ、碁石の感触を樂しんだり、碁を打つ音の響

きを楽しんでたりしながら悠々とした時を過ごす」と詠じていたのである。

四

蘇軾の囲碁に関連する文章をもうひとつ取りあげる。

南嶽の李崑老は睡を好む。衆人食に飽きて棋を下す。崑老輒枕に就き、數局に一展轉す。云う我始めて一局す、君幾局せるかと。東坡曰わく、李崑老は常に四脚の棋盤を用い、只だ一色の黒子を着す。昔邊韶と敵手、今陳搏に先を争わる。着する時は輸贏有るに似て、着了れば並びに一物無し。歐陽公の夢中の作の詩に云う、夜涼しくして笛を吹く千山の月、路暗くして人を迷わす百種の花。棋罷わりて知らず人の世を換はれるを、酒闌わにして客の家を思いうを奈いかんともする無し、と。殆ど是の謂ひなり。

〔南嶽李崑老好睡。衆人飽食下棋、崑輒就枕、數局一展轉。云：我始一局、君幾局矣。東坡曰：李崑老常用四脚棋盤、只着一色黒子。昔與邊韶敵手、今被陳搏爭先。着時似有輸贏、着了並無一物。歐陽公夢中作詩云：夜涼吹笛千山月、路暗迷人百種花。棋罷不知人換世、酒闌無奈客思家。殆是謂也。〕（『文集』卷七一「書李崑棋」）

この文章にある李崑老という人物については詳細は不明であるが、まずはこの人物が「睡りを好む」ということについて語られる。そして李崑老は眠って夢の中で碁を打つのである。李崑の碁盤は「四脚の棋盤」つまり李崑が眠るベッドで、「只だ一色の黒子を着す」（黒色の碁石ばかりでうつつ）とあるのは、昼寝のことを「黒甜」ということと関連がある。蘇軾の「發広州」詩（合注）卷三十八）に、「三杯軟飽後、一枕黒甜餘」とあり、その自注に「俗謂睡為黒甜。」

という。李崑が碁仇としてゐる「邊韶」は字を孝先といつて後漢の人。文章に優れていて、『後漢書』卷八十「文苑傳上」に弟子に昼寝を咎められて「但だ眠りて、經事を思ひ、寐ねて周公と夢を通じ、靜かにして孔子と意を同じくせんと欲するのみ。（但欲眠、思經事。寐與周公通夢、靜與孔子同意。）」と應じたというエピソードが載せられている。後に「邊韶寝」は昼寝を指す語となった。「陳搏」字凶南は仙術を修め宋の太宗、真宗に重んじられた人物で、眠ると百日以上起きなかつたという（『宋史』卷四五七「隱逸上」）。いずれの人物も「睡りを好む」という点で、李崑老の好敵手というのであろう。夢の中で囲碁を打っているときには、勝つたり負けたり試合が繰り返されたが、李崑が夢から覚めて現実の世界に戻ればそんな勝負の世界は跡形も無い。

この文章の中で蘇軾は碁と夢とを、ともに現実の世界を離れた所で心を自由に遊ばせる境地としての共通性を見出しているのではなからうか。かつて拙論「蘇軾と琴」の中で、『列子』『黃帝篇』に黃帝が晝寝して夢で華胥の国という理想郷に遊んだという話が見えるように、晝寝という行為は隱逸志向の文人にとって現実社会ではかなえられない理想を追い求めるという消極的反俗のポーズであつた。淵明が北窗の下で晝寝をし太古に思いを馳せるという行為も一種の反俗的姿勢とみなされ、そうした姿勢の象徴として「北窗」という語が後代の多くの詩に取り入れられて行く。」と述べ、蘇軾にとつても晝寝は淵明の隱逸生活を意識させるものであることを指摘したことがあつた。ここで李崑老が晝寝の中で古今の人物を相手に自由に碁の勝負を挑むということを記すことによつて、「理想郷に遊ぶ」行為として囲碁の境地にも現実とは別の時間が流れていると認識していたと考えられる。

このような考え方が蘇軾一人のものでないということは、蘇軾がこの文章の後半に上げる歐陽脩の詩からも窺われる。歐陽脩の詩「夢中作」は先にあげた「爛柯」の故事を典拠としている。『述異記』に記載されている「爛柯」の故事の

原文を次にあげておく。

信安郡石室山に、晋の時樵者王質伐木して山に入り、二童子の棋するを見る。王質に一物の棗核の如きを與へ、之を食べれば飢えを覺えず。持する所の斧を以て坐に置きて觀る。童子の指して之が為に曰わく、汝の斧柯爛る。質郷閭に帰れば復た時人無し。「信安郡石室山、晋時樵者王質伐木入山。見二童子棋。與王質一物、如棗核。食之、不覺飢。以所持斧置坐而觀。童子指為之曰、汝斧柯爛矣。質歸郷閭無復時人。」

王質が迷い込んだ山中は現実とは流れる時間が全く異なる別世界である。先に蘇軾が引用した歐陽脩の詩の前半部に「夜涼吹笛千山月、路暗迷人百種花。(涼しい夜風に吹かれながら、笛の音が流れる山中を月明かりを頼りにしてさまよっている。暗い夜道をいくうちに花々のよい香に誘われいつしか足はそちらへ向かっていた。)」とあるように、夢の中で作者が迷い込んだ山中は音楽が流れ様々な花が咲き乱れる美しい世界であった。歐陽脩の詩では省略されているが、そこにはおそらく碁を打っている者達がいるのであろう、傍らで彼らの打つ碁を見ているうちに、現実の世界では世代が代わるほど長い時間が流れていたというのだ。詩の後半「棋罷不知人換世、酒闌無奈客思家」は『述異記』故事の「斧柯爛」、「帰郷閭無復時人」というのをふまえた表現であらう。

このようにもともと碁の故事である「爛柯」の物語には、夢については何も書かれていないが、歐陽脩の詩では王質が迷い込んだ異次元の世界と夢の世界とを結びつけて詠じている。これら夢と、碁盤の上で繰り広げられる碁の勝負との共通性は、人に現実世界を忘れさせ、すばらしい体験をさせてくれるにもかかわらず、終つてしまえば一瞬にして跡形も無く消え、何も残らないという点ではなからうか。

しかしそのような特性があればこそ、蘇軾をはじめ当時の士大夫達が心を遊ばせるものとして囲碁を愛好したことが窺われるのである。

次の詞「滿庭芳 余黃州に謫居すること五年、將に臨汝に赴かんとして、滿庭芳一篇を作り黃人に別る。既に南都に至り、恩を蒙りて陽羨に放歸せらる、復た一篇を作る（余謫居黃州五年、將赴臨汝、作滿庭芳一篇別黃人。既至南都、蒙恩放歸陽羨、復作一篇）」（龍榆生校箋『東坡樂府箋』卷二）の後闕において、蘇軾は非現実的世界のできごとを描くのに、圍碁の故事として人口に膾炙する「柯爛」の故事を効果的に用いている。

無何 何處有 銀潢盡處 天女停梭 何ばくも無くして 何れの處にか有らん 銀潢の盡くる處 天女梭を停む
問何事人間 久戲風波 問ふ何事ぞ人間にして 久しく風波に戯むる

願謂同來稚子 應爛汝腰下長柯 顧りみて謂う同來の稚子に 應に爛るべし汝が腰下の長柯
青衫破 羣仙笑我 千縷挂煙蓑 青衫破れ 羣仙我を笑う 千縷に煙蓑挂かる

この詞の前刺では現実の情景を詠じるのに対し、後刺では蘇軾の夢の中でのできごとを詠じ、「広々とした河の流れに身をまかせているうちに、天の川の川辺で織女と出会った。織女は機織の手をとめて、「いったいどうして長い間浮世の煩いに身を任せているのか」と尋ねた。そして振りかえってお供の稚児に、「おまえの腰の下の斧はきつと腐っているだろう」といった。（気がつく）私の役人の服はぼろぼろで、こんな姿を群仙が笑っている。私が羽織った簑には幾筋もの細い雨が降り注いでいる。」という。この詞は、現実の時間を忘れさせる水との戯れに、圍碁を打つ境地との共通性を見出した例として挙げられるであろう。

以上蘇軾の「觀棋」詩と、「書李崑老棋」とを中心にして蘇軾の棋に対する考え方を分析した。蘇軾の文人趣味を詠じた詩文の中で「棋」を詠じたものは比較的少ない。また自ら「子瞻嘗自言、平生三不如人、謂著棋、吃酒、唱曲」というが如く、実際の碁の打ち手としてその醍醐味を詠じるという作品もなかった。しかし「棋」を詩の題材として扱うときに蘇軾は、伝統的に詠じられてきた囲碁の世界を踏まえながら、その興趣を自らが会得している他の文人趣味の妙味に比擬して表現するという独自の工夫を加えた。それが「觀棋」詩の場合は「釣り」に代表される水との戯れであり、「書李崑老棋」に描かれたのは「晝寢」「夢の世界」であった。蘇軾におけるこれら「棋」「釣り」「晝寢(夢)」の共通性は、いずれにおいても現実世界からワープして心を自由に遊ばせることができる融通無碍な世界を構築していることであり、しかもまた現実に戻ればその構築した世界は瞬時に跡形も無く消えるということであった。心を自由に遊ばせることが重要であるがゆえに蘇軾の「釣り」は釣果にこだわることなく、蘇軾の囲碁は勝敗にこだわることがなかったのである。

注

- 1 「蘇軾と琴」(『日本中国学会報』第四十八集 一九九六年)
- 2 「孟光」は隱者梁鴻の妻(『後漢書』「逸民傳・梁鴻」)。
- 3 戸外に出て竹林で棋を樂しむという風景は晋の干宝の『搜神記』に「漢宮内八月四日、出雕房北戸竹下圍棋」と見える。
- 4 同様の「投」の用法として、韓愈「平淮西碑」に「蔡之卒夫、投甲呼舞」が見える。
- 5 仇兆鰲「杜詩詳注」では顧陶「類編」「飛蛩自照水、宿鳥競相呼」の句を引く。

6

また「空鉤」の故事は、『合注』卷三の「壬寅二月有詔令郡吏分往屬縣滅決囚禁。自十三日受命出府、至寶雞、虢、郿、盩厔、四縣。…」詩にも、「聞道磻溪石、猶存渭水頭。蒼崖雖有迹、大釣本無鉤。」と見える。蘇軾がこの詩の自注で「十四日、自寶雞行至虢、聞太公磻溪石在縣東南十八里、猶有投竿跪餌而膝所著之處。」とあるように、これは有名な太公望の故事を用いたものである。『合注』では王註の「師曰、太公以直鉤釣。…堯卿曰『楚辭』以直針而為鉤兮、又何魚之能得、蓋古人所釣、其意不在魚耳。若任公之釣其幾是乎。」を引用している。また王起の「玉璜賦」に、「昔太公之未遇也、隱于渭之濱、釣于渭之津、坐磻石而不易其操、垂直鉤而不撓其神。」と見える。

7

注1参照